

第26回 I G C —パリ—

本座 栄一 (地殻物理部)
Eiichi HONZA

まえがき

1980年7月7日～7月17日の11日間にわたりパリで第26回 IGC が開催された。約10年近く前のことでもあり、記憶も定かでない部分もあるが、1992年の京都開催の第29回 IGC の一助にもなればと思い会議後送られてきた会議概要等を基に紹介してみる。

フランスではそれまでに過去2回 IGC が開かれ、第26回が3回目にあたる。第1回 IGC が1878年に、第8回 IGC が1900年に、それぞれパリで開かれている。今回の会議を準備するにあたり、8委員会が設けられた。出版・巡検・財務・企業関係・科学プログラム・同伴者・社会活動および公報・展示の各委員会である。

ファースト・サーキュラーは6万部印刷され、会議出席に関する一般情報と学術情報を盛り込み送付された。それに対して6千通の返事が寄せられた。セカンド・サーキュラーは2万5千部印刷され、上記に加えて新たな情報、巡検リストの変更等が記載された。サード・サーキュラーは1万部印刷され、上記の補足説明が盛り込まれた。

会議の登録料は申し込み時期により3段階とし、1,000フラン・1,200フラン・1,400フランであった。当時1フランが80円弱の時であり、個人の負担としてはかなりの高額であった。

宿泊はパリ市内の4つ星から1つ星のホテルを確保し特別料金を交渉した。他に大学の宿舎を入れて総計2,200室を確保した。

会議とイベント

会議はパリのポートマイヨにある国際会議場で行われた。ブルターニュの森の北端にあり、地下鉄の終点と直結し、交通の便が良いところに位置している(写真1と2)。

7月7日の開会式には、私は欠席したが、記録によると、1900年の国際博覧会々場として建設されたグランドパレスで開かれ、6,000人が参加している。環境省大臣が出席し挨拶している。開会式後の開会レセプションでは総延長300mのビュッフェを並べ54,000コのカナッペ、60kgの乾燥果物、300kgのプティフル、1,300本のシ

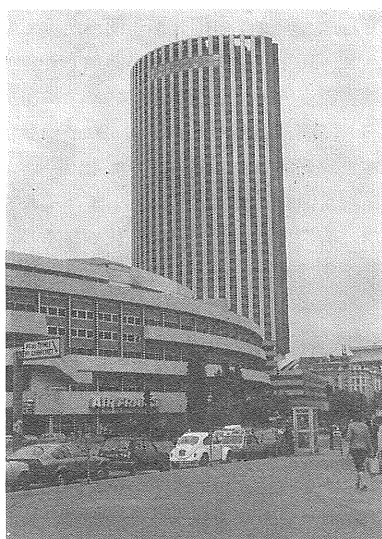


写真1 第26回 IGC の開かれたパリ、ポートマイヨの国際会議場と隣接する高層ホテル



写真2 国際会議場正面玄関



写真3 閉会式場に向うディスカールジスタン大統領（当時）（左）、オーボワン第26回 IGC 会長（中央）、サングニア事務局長（右）



写真5 ベルサイユ宮殿におけるカクテルパーティ会場

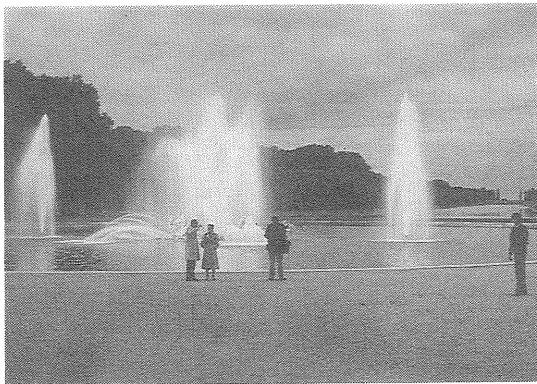


写真4 ベルサイユ宮殿における噴水イベント

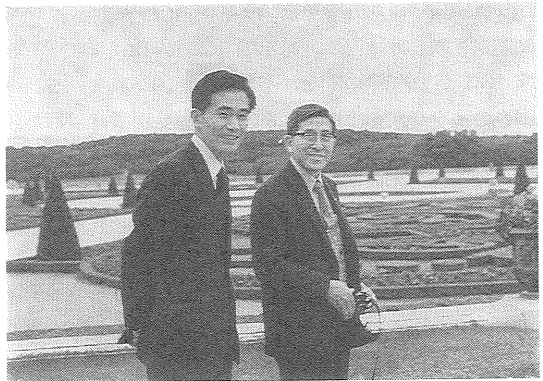


写真6 ベルサイユ宮殿で、渡辺武男氏（右）と兼平慶一郎氏（左）。両先生とも故人となられた。

ャンパン、400本のウイスキー、1,200本のフルーツジュースが出されたとのことである。

閉会式にも私は欠席したが、3,000人が参加し、当時のディスカールデスタン大統領が挨拶している(写真3)。

会期中に幾つかの有料イベントが開催され、これらに数100人から3,000人が参加している。二夜にわたるノートルダム寺院での演奏会、プレイホールでの仏各地の民族ダンス(400人参加)、フランスワインとチーズの夕べ(850人参加)、ベルサイユ宮殿での噴水イベントとカクテルパーティの一夜(3,000人参加)等があった(写真4・5・6)。

同伴者プログラムには、バスによるパリ市内見物、オルリアンズの寺院見物と BRGM における昼食会、セーブネル氏による「貴鉱物」とレブション氏による「海洋開発」と題する講演会等が催された。これらには120～130名の参加者があった。

ジュニアコンGRESSは5日間のプログラムが生まれ、

最初にニースまで行き、天文学の紹介から北へ向っての地質巡検があり、8～16才の子供達24名が参加した。展示会には各国の地質調査所・企業等が197ブースに出展し、講演会場と同じ国際会議場内にある4,400㎡の展示場で開かれた。地質調査所も1ブース借りて出展したが、地質図・海洋地質図を会議出席者に託して、それを張っただけの簡単なものであった。パリ在住の日本の地学関係者は私をそこまで連れていき、そのおそまつさをしかった。

科学プログラムについて

会議の3年前に、IUGS は組織委員会と協議して、国際学会が個別にシンポジウムを開いて本会議の講演と重複しないように科学プログラムを組むことにした。これはIUGSの勧告となって各国際学会に通告された。ファースト・サーキュラー出版後の1978年2月にパリで第1



写真7 ノルマンディ海岸白亜系の巡検。第二次大戦のノルマンディ上陸作戦の主舞台でもあり、記念館、犠牲者の墓地等がある。

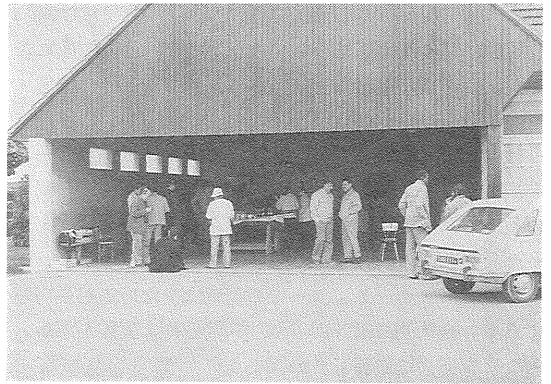


写真8 巡検地での昼食。小学校の講堂を借りて簡単な手作りのサンドイッチ、ワイン等が出された。

回の調整委員会を開き、フランスのコンビナーと国際学会の担当者が出席し、IUGSの意向を受け入れることで合意した。外人コンビナーは国際学会とフランス人コンビナーの話し合いで決め、これを組織委員会から指名することにした。これらはセカンド・サーキュラーにももられた。学術講演の運営方法に関する詳しい情報が、1979年6月に各コンビナーに知らされた。なお調整委員会は計3回開かれ、第2回が1980年2月に、第3回が開会日に開かれている。セッションは7月8日～7月17日間に8時半から18時までに18室使用して開かれ、20セッションの下に53テーマと76のシンポジウムを開き、総計236セッションに2,148題の講演が受け付けられた。これは主として一般公募による講演である。開会と閉会時の特別講演は組織委員会で招待した。開会特別講演には M. J. AUBOMIN・M. L. SILVER・M. D. P. MACKENZIE・M. J. EGLINTON・M. E. PICCIOTO・M. R. A. PRICE 各氏が招請され、M. P. AIGRAIN 氏がまとめるという形をとった。

コロッキアは7テーマから成り、それぞれが数題のセッションから成っている。これは全てコンビナーによる招待講演である。筆者が招請されたのもこの中の「大陸縁辺域の地質」というテーマのもとに「アクティブマージン」というセッションであり、他に「パッシブマージン」が設けられ、仏から R. BLANCHET と L. MON-TADERT がコンビナーとなり、「アクティブマージン」の外人コンビナーとして D. KARIG 氏が指名されていた。

ちなみにコロッキアのテーマは以下のとおりであった。

1. 鉱物資源

1989年12月号

2. エネルギー資源
3. 大陸縁辺域の地質
4. 海洋底の地質
5. テチスと関連したアルプスチェインの地質
6. 先カンブリア紀からヘルシアン以降の堆積盆からみたヨーロッパの地質
7. フランスの地質

この他にジオダイナミクスに関する特別シンポジウムが開かれた。

巡検について

巡検を組むにあたり、ヨーロッパの18ヶ国に手助けをお願いしている。又、11セッションのコンビナーからもテーマ別の巡検を提案してもらっている。会議前後(巡検AとC)に9日間の巡検を実施すると定め、161テーマから216コースが選出され、ファースト・サーキュラーに載せられた。その時点で4,000人が参加を希望した。最終的には87コースと10コースの追加が決まったが、実際に実施されたのは45コースであった。1980年1月には1,085人の参加希望を受け付けたが、実際の参加者は927人であった。

会期中の土曜日と日曜日のB巡検は6コースに総計150人が参加した。筆者の参加したのはこの中の「ノルマンディ地方の白亜紀の層序」という巡検であり、約40名が参加した。ここでは如何にして安い経費で実施するかということに意を使っていることが良く分った(写真7, 8)。

この他に1日巡検が29コース、研究機関の訪問等が25コースあり、それぞれ合計601人、696人が参加してい

る。

IGCの巡検は総じてキャンセルが多く、後の編成に苦勞が伴い、また実際に実施されるものでも、その準備・案内に多くの苦勞が伴う。パリにおけるIGCの巡検にも幾つかの反省点があるとのことである。1つのコースを廃止した場合、他日への変更はあまり好まれず、同日の他コースへのふり替えか返金が多かった。サード・サーキュラーから会期までの期間が短かすぎた。セカンドからサード・サーキュラーでの変更は少ない方が良好である。全体的に第26回IGCの期間中は天候が悪かったことも巡検に影響しているようである。

出版について

会議参加者に配布された出版物はプログラムとプロシーディング、アブストラクトの他にコロキウム7テ

ーマ分が7冊のプロシーディングスとして渡された。これらに全てが盛られているわけではなく、一部は学術雑誌の特集号等でも印刷されている。

巡検ガイドブックはヨーロッパの17コース、フランスの6コース、テーマ別の14コース分が印刷された。

おわりに

パリにおける第26回IGCは成功した例であるといわれている。その一つに、長期にわたり良く準備したこともあげられる。またフランス人が組織的に仕事ができるという国民性が良い方向に働いていたからかもしれない。パリはヨーロッパの中心に位置し登録料が高額でもヨーロッパの人々にとっては旅費が安いいため、それほど大きな負担とならなかったことが多くの参加者が得られた一因とも考えられる。

~~~~~ 地学と切手 ~~~~~

ニュージーランドのエグモント火山

P. Q.



ニュージーランド北島の南西岸に位置する主に安山岩からなる成層火山で国立公園となっている。火山本体はほとんど対称的で、海拔2,518mである。頂上には西側に開いた火口があり、半ば破壊された溶岩円頂丘によって埋められている。裾野は緩く、火山砕屑物によって構成されている。

エグモント火山は¹⁴C年代測定によれば45,000年以前から活動したとされ、K-Ar年代測定によれば溶岩から21,000年の値が得られている。頂上北方には標高1,399mのポウアカイ・レンジがあり、切手では左手の方のこぶになっているが、この年代は22万と25万年前である。

エグモント火山の最近の活動については年輪年代学と放射炭素による年代により、よく追求されている。

550年前の活動は小規模の火砕物の活動であり、頂上

火口が西に開いたのはこの時の活動と考えられている。

400-450年前には最も激しい活動が起った。主に西方に向かって活動し、マオリ族の炉を火山灰が覆い、火口から16kmの所でも植生が燃え上った。活動は中央火口からの directed explosion だった。

300年前の活動は破壊された植生の年輪から推定される。西方への directed explosion があった。軽石は東へも降下した。この活動の火山灰に覆われたマオリ族の炉からの材木は360±60, 400±60年の¹⁴C年代を示している。火山灰はこれより新しくなる。

200年前の噴火は火山灰を多く南東側に降らせた。

切手は3pは1935年の23cは1971年のいずれも普通切手である。